

秋田のなかのロシア探訪

——ロシア文化と交流史蹟を訪ねる

——秋田のなかのロシア探訪旅行に出かけられたとお聞きしました。主催は日本のなかのロシア研究会（長塚英雄主宰）ですね。秋田県の対岸は日本海をはさんでロシア沿海州です。県内にはロシアとのさまざまな歴史的エピソードがあふれていることはあまり知られていないように思います。

長塚——ええ、今回の取材で我々も驚きましたが、函館や長崎に匹敵するほどのロシア関連の文化・史蹟があります。7名でレンタカーを借りて、大曲市—雄物川町—本荘市—象潟—秋田市—土崎—大館市—小坂町—黒石市と廻りました。強行軍の3泊4日の旅でした。

雄物川町の崇念寺とビクトル・スタルヒン

——最初に雄物川町の崇念寺を訪問したのですね。

長塚——明治・大正時代にシベリア大陸を横断した数少ない日本人の一人である高橋義雄さんは明治20年（1887）に雄物川町で生まれ、シベリアのネルチンスクでアントニーナ・アラズモアさんと結婚します。この街にある崇念寺の住職・高橋大我さん（83歳）はハーフの息子さんです。長い間、日本でただ一人の青い目のお坊さんといわれてきました。父の高橋義雄さんはシベリア出兵の陸軍通訳として従軍ののちにハルビンからボルガ演芸団の団長として門司から仙台まで各地を巡業して帰還、崇念寺の住職を拝命、保育園開設、娘の久仁恵さんが三百勝投手スタルヒンと結婚します。ロシア革命後の混乱の渦の中で、ユーラシア大陸を駆け抜け、時代に奔弄されながらも激しく生き抜き活躍した人々の中にこの高橋一家がいたのです。この寺に白球をイメージした丸い石を置いたスタルヒンと久仁恵夫妻の墓碑があります。スタルヒン33回忌にあわせて長女ナターシャ・スタルヒンと高橋大我さんが話しあって建立したものです。高橋大我夫妻は非常にお元気で本堂も新しく立派になっていました。町ではスタルヒン記念野球大会を毎年開いているとのこと。

由利本荘の露国遭難漁民慰霊碑

——東北の小さな町に世界史の激動を感じ取ることができるお寺さんが存在するというのは本当に興味深いです。次は本荘ですね。

長塚——本荘市深沢海岸に「夕日の見える日露友好公園」があります。露国遭難漁民慰霊碑はそこに建っています。住民は、昭和7年（1932）12月に漂着したロシアのイワシ漁船の乗組員3名を救助、16才のニコライ・バクレンコ少年の餓死遺体を収容し供養した歴史があります。60年目にあたる昭和57年（1982）にニコライ少年の慰霊碑が建立されました。碑には大友康二作詞、菅原良吉作曲の追悼歌「空ひとつ、海ひとつ」

が刻まれています。夕日の美しい深沢海岸に位置しており、深沢住民の遭難ロシア漁船を救援した歴史のドラマが語り継がれ、世界平和を祈念するにふさわしい場所です。明治・大正・昭和前期の日本海側ではこのような漁船の遭難が多く沿岸住民はたびたび人道救助をしているのが目立ちます。

ロシアの種痘術を伝えた藩医・斎藤養達と臼井禎庵

——この辺は風光明媚なところで知られています。松尾芭蕉が感嘆したという象潟（きさかた）を鳥海山を背景に見て仁賀保温泉に1泊ですね。翌日は慌しく朝8時に出発、秋田市に向かいます。

長塚——江戸時代にたびたび流行を繰り返した痘瘡（天然痘）の予防医療は大きな医療課題でした。文政7年（1824）、わが国最初のロシア直伝の牛痘種痘者である青森県川内村出身の中川五郎治は松前藩士で、榎林宗建が長崎で成功した嘉永2年（1849）より25年も早く行っていたことはあまり知られていません。秋田県でも長崎より6年も早く種痘に成功しています。さまざまな文明がすべて、南から、長崎から伝播したのではなく、北からも伝播したものがいくらかもあるのです。松前の医師白鳥雄蔵から習い、秋田藩医臼井禎庵が最初に自分の娘に施種したのが秋田の最初で、天保14年（1843）でした。また、斎藤養達ら一門が種痘術を拓めた功績も大きいです。斎藤養達（安克）の墓は、秋田市の宝塔寺にあり取材できたのですが、臼井禎庵の墓は鱗勝院にありましたが移転され不明でした。

土崎のロシア飢饉救済運動「種播く人」顕彰記念碑

——そこから、大正時代のロシア飢饉救済運動「種播く人」顕彰記念碑と図書館資料室のある土崎港の取材です。

長塚——昭和39年（1964）5月、秋田市土崎港中央6丁目の秋田市立土崎図書館前に「種播く人土崎版」の表紙を表面に拡大した『種播く人』顕彰碑が建立されました。同図書館には二階に『種播く人』資料室が設置されています。現代史上の大事件であるロシア革命で混沌とする国際政治に少なからぬ影響を与えた1920年代（大正時代）のロシア飢饉救済運動とプロレタリア文学運動の発祥地である土崎港。首都東京ではなく東北の地、秋田の土崎からスタートしたことが日本歴史上で特別の意味をもつことは疑いありません。土崎小学校時代の同級生一小牧近江、金子洋文、今野賢三の三人の若者が中心になって、「飢えたるロシアを救え」をこの「種播く人」運動の原点として位置づけ、雑誌・パンフ・チラシの発行、慈善鍋とバザーなどの飢饉救済運動は、全国に波及していったのです。三浦環の義捐音楽会、与謝野晶子らの露国飢饉救済婦人有志会の寄付金活動と幅の広い運動へと成長し、シベリア出兵反対・撤退、日露通商貿易開始の機運が高まり、誕生したロシア国承認の運動へと展開していきました。当時の国民のあいだに広がる戦争と暮らしへの不安感を克服すべく果敢に時代に挑戦した青年たちの勇気を感じることが出来ま

した。出迎え・案内していただいた北条常久先生、顕彰会・図書館の皆様へ感謝申し上げます。

大館市の北鹿ハリストス正教会曲田聖堂

——秋田といえばスタルヒンと並んで、ハリストス正教会曲田聖堂が知られています。
長塚——そうです。我々は土崎から大館市へ向かいました。北鹿ハリストス正教会曲田福音会堂は、秋田県大館市曲田にあります。花輪線で3つ目の大滝温泉駅まで行き、徒歩20分ほどです。秋田杉を加工し聖所の架構法も四方から木製アーチを伸ばしてドームをかけるなど、貴重な木造ビザンチン様式の建物。建築面積50・7平方メートル（約15坪）で明治25年（1892）7月31日に建立したものです。

幕末に単身で渡来したニコライは、さまざまな迫害に臆することなく、困難をのりこえ、宣教をめざしていくが、彼に影響を与えた日本語教師の一人は大館市の医師・木村謙斎でした。大館市曲田地区の信徒・畠山市之助は、東京復活聖堂の施工式に出席し感銘を受け、曲田にも聖堂を建てることを決意したのです。工事は主教にお願いしシメオン貫洞を大工頭領として派遣してもらい、約三ヶ月をかけて畠山家敷地内に総工費350余円をかけて完成しました。イコンは山下りんが描き、いまも19点展示されています。田園に囲まれひっそりと建ちつくす曲田の聖堂は、明治時代の擬洋風建築として文化的な価値が認められ、昭和41年（1966）に秋田県から「現存する我が国最古の木造ビザンチン様式教会堂建築」として重要文化財の指定を受けています。聖堂内のイコン19点は近代日本の黎明期における洋画法を用いた例として美術史上の価値も高く、平成3年（1991）大館市の文化財に指定されています。出張中の釜谷幹雄輔祭の妹・釜谷恵子さんのご配慮で取材ができました。

ニコライに日本語を教授した木村謙斎

——大館市にはいま語られました木村謙斎の子孫がお住まいで遺品ものこされているとか。
長塚——幕末にニコライ司祭に日本語を教授した木村謙斎の子孫にお会いすることと保存されるニコライのコップを拝見することが今回の取材旅行の目玉でした。

江戸時代の後期になると、蝦夷周辺におけるロシアの進出が著しく幕府は蝦夷地警備を東北諸藩に命じました。安政4年（1857）に秋田藩佐竹西家も出兵を命じられ、木村謙斎も軍医として蝦夷に勤務しました。除隊後再度函館に渡り明治5年（1872）まで11年間滞在したそうです。函館では医業のかたわら、私塾も設けて蝦夷地警備の武士に漢籍を講じました。ニコライは毎日のようにこの塾に通い熱心に勉強しました。日本語・日本史・儒教・仏教などの知識は謙斎から学んだものです。謙斎一家が函館を去るときにニコライはコップ3個とフォーク1個を謙斎に贈りました。西洋茶碗（コップ）と西洋箸（フォーク）を入れた箱には、「元治元年甲子四月於箱館魯西亜旅館魯西亜僧官ニコライ与之木村光永」と書かれています。コップ2個を保存している大館市の木村高明家（眼科医）

では、謙斎の七男の木村泰治さんの保存していたコップを引き継いで保存しているのですが、1個は親族の山城家に保管されているという。晩年の謙斎は、子弟教育のための私塾と大館病院設立のために尽力、明治16年（1883）69歳の生涯を終えています。墓は一心院に一族と共にありました。木村家は650坪の古い豪邸で往時のご活躍がしのべれます。

日露国交回復を実現した男・久原房之助

——貴重な取材だと思います。強行スケジュールでお疲れだと思いますが、一行は大館に1泊のあと大湯環状列石（ストーンサークル）を見て、小坂町へ行くのですね。

長塚——小坂町は、スターリンと対話したり、1956年の日露国交回復を実現した男・久原房之助ゆかりの地です。山間の小さな町が大正レトロの街に変身しており、小坂鉱山事務所の3階の展示室には、小坂鉱山にかかわった技術者たちの記録と久原房之助のモニュメントがあります。久原は、大学卒業後に藤田組に入社、小坂鉱山に赴任し、閉山方針を覆し自容製錬に成功、日本一の銅山の基礎を築きました。のちに、衆議院議員、逓信大臣、政友会総裁等を歴任、戦後、日中日ソ国交回復国民会議の会長に就任、平塚常次郎・風見章・馬島們らと国民世論を動かし、日ソ交渉の実現、鳩山訪ソの決断・実現、共同宣言の調印へと導いたフィクサーと言われます。当時85歳であった久原は、25歳で日清戦争、35歳で日露戦争を見て、48歳で孫文、57歳でスターリンと会い親しく対話しており、その両国とも国交の回復ができていないのは遺憾だと強い意思を示していたのです。

——十和田湖で1泊し、翌朝に黒石市に秋田雨雀記念館を訪れ、美しい鶴の舞橋を見て、三内丸山遺跡から青森空港へと廻ったと聞いています。

長塚——予定どおりのコースで無事に完結しました。最初のコース案には入っていたのですが、時間がなくて廻れなかった4箇所についても触れておきたいと思います。

① ショーロホフと親交のハーピスト・阿部よしゑの生誕地・横手

約300年の日露交流史において阿部よしゑほど広範囲のロシア文化人と親交した日本人はいないと言っても過言ではありません。明治37年（1904）、横手市に生まれ、旧栄村阿部由蔵村長の長女として秋田高女に学んだ阿部よしゑは、昭和6年（1931）にモスクワへ行き、昭和7年（1932）モスクワの日本大使館に勤務、ポリショイ劇場首席ハーブ奏者のエルデーイに学び、昭和12年（1937）から7年間パリ音楽院でマルセル・トゥルニエらに師事、昭和19年（1944）同音楽院コンクールで第1位を獲得しています。帰国後は阿部ハーブ研究所を主宰、東京芸大講師、東京交響楽団員などを経て、昭和44年（1969）63歳で死去しました。昭和7年から12年の5年間の駐ロシア日本大使館勤務の期間を中心にノーベル賞作家ショーロホフらロシアの文化人と多彩な交流・親交を結びます。彼女が親交したロシア文化人は、ショーロホフのほかにオリガ・クニツペル、ノーヴィコフ・プリボイ、セルゲイ・ミハルコフ、イヴァン・ブーニン、ニ

コライ・ネフスキー、ニコライ・コンラッドなど数え切れません。パリから持ち帰ったエラル社製のハーブは、映画「ビルマの豎琴」で使用され、平成20年（2008）には東京芸大に寄贈されました。

② 日露戦争捕虜収容所に使用された県会議事堂とマトン氏邸宅

日露戦争時の捕虜収容所は、日本各地に29か所ありますが、そのうちの 하나가秋田で87名を収容しました（『陸軍政史』）。秋田県会議事堂とキリスト教宣教師のフランス人マトン氏邸宅を収容所とし、明治38年（1906）8月10日に開設、8月20日と21日に分かれてロシア兵捕虜一行が到着しました。収容後に将校のほとんどは背広を新調したり、絵画・写真の制作を希望するもの、日本語に関心をもつものなどがいたことが記録されています。こういうことを言うと不思議な顔をする方もおられますが、太平洋戦争の残虐な虐殺やシベリア抑留の捕虜と違い明治の日本政府は国際条約を遵守して紳士的な捕虜の扱いをしていたことが分かります。12月に順次送還が始まり、16日をもって閉鎖されました。秋田市では、捕虜の死亡者がいなかったためロシア人墓地は存在しませんが、日露海戦の水兵の遺体が男鹿半島に流れついた記録があります。

③ ロシア皇帝の勲章授与された男鹿市船川港の沢木駒吉

シベリア出兵の際には第八師団第7連隊が男鹿市船川港から出発するなど、秋田県においては重要な港湾である船川港に、明治16年（1884）11月、ロシア人2名、清国人15名が漂着しました。『秋田沿革史大成』『函館新聞』明治16年11月24～12月4日によると、ロシア海軍士官アバサ・アレキセーと商人カレツキーは、新潟の北洋丸に乗り函館経由でウラジストクに帰りました。帰国に際し、船川の沢木駒吉から旅費120円を貸与され、帰国後に公使より約束どおり返され、さらにロシア政府はこの好意に感謝して「神聖スタニスラス勲章」を授与しました。男鹿市教育委員会によると、沢木家の子孫は現在当地にいないと勲章の所在は不明とのことであった。この「魯国船遭難」事件の際に函館から、通訳として小野寺魯一、長岡照止兩名が派遣されています。『秋田沿革史大成』の著者橋本宗彦は、「沢木氏ノ厚志ニヨリ速ニ旅費ヲ貸与セル、実ニ外交上、大ハ日本ノ名誉、小ハ本県又ハ一身ノ名声ヲ各国ニ聞知セシメタルモノニシテ、誠ニ好スベキ」「清国ヨリハ何ノ謝辞モナク、其無礼ナル又思フベシ」と書き、ロシアの礼儀ただしさを評価し清国の無礼を批判しています。

④ 聖ウラジーミル勲章を授与されたベトル佐々木

山下りんとともにイコン画家として著名なベトル佐々木は、1982年にロシア正教会から最高の荣誉である聖ウラジミール勲章を受章しています。昭和14年（1939）大館市に生まれ、神田駿河台の日本ハリストス正教会・ニコライ堂に併設された正教神学校で学びながら、千代田美術学校に通いました。イコン画家をめざしギリシャ、フィンランドに遊学、ヴァラモ修道院で本格的にイコン研究に打ち込みました。大主教パウエルや大統領の信頼を得て、フィンランド人マルヤさんと結婚、たくさんのイコン画を製作しました。平成11年（1999）60歳で逝去しました。

——このようにたくさんの歴史のエピソードをお聞きしますと、本当にロシアとゆかりのある秋田県というイメージになりました。今後の「日本のなかのロシア研究会」のご活躍を期待しています。ありがとうございました。